

縦横無尽 タテとヨコ色とかたちのフィールドワーク(11) : タテ系の張力と織機の型式1 : 手機

著者	吉本 忍
雑誌名	月刊染織
巻	280
ページ	56-58
発行年	2004-07-01
URL	http://hdl.handle.net/10502/5210

縦横無尽

タテとヨコの色とカタチのフィールドワーク

吉本 忍

タテ糸の張力と織機の型式1

手機

織機の6類型

世界の諸民族のもとで使われてきた織機のうちには、さまざまな種類が見いだされる。そうした織機には、一般に、他の多くの道具と同様に使い手の社会で呼びならわされてきた名称がある。また、それらの名称とは別に、研究者をはじめとする第三者によって名づけられた名称も数多い。しかし、そうしたさまざまな織機名称は、多くのばあい、わが国の「いざり機」、「高機」、「苧機」などのように、身近なところにある、種類の異なるいくつかの織機を単に区別するといった程度のものでしかなかった。このことは学術的な分野においてもほぼ同様であり、これまでには織機の分類にさいしても、織機の構造や機能に注目し、共通する視点から類別した織機に名称をつけるということも、きわめて稀であった。

そうしたことから先月号では、世界の各地で使われてきた織機の型式をタテ糸の張力との関係において6種類に分類し、類別した個々の型式の名称についても、タテ糸の張力との関係が容易に理解できるように、手機、足機、腰機、地機、杵機、錘り機という6種類に大別した。そして、織物を織るという作業を、①織機を必要としない織り、②手機に

よる織り、③足機による織り④腰機による織り・1、⑤腰機による織り・2、⑥地機による織り、⑦杵機による織り、⑧錘り機による織り・1、⑨錘り機による織り・2、⑩錘り機による織り・3、という10種類に大別した。

織機の構造や織機を構成する部品の機能に注目して織機の型式分類をおこなおうとするばあい、本誌269号・271号で紹介してきたタテ糸の整経方式の違いや、綜統の種類の違いなどによる型式分類も有効ではある。しかし、先月号までに繰り返し述べているように、織物を織るためには、タテ糸に張力が備わっていることが不可欠である。したがって、今月号からの連載では、世界の諸民族のもとで使われてきたさまざまな織機を、手機、足機、腰機、地機、杵機、錘り機というタテ糸の張力に注目した分類にもとづき、個々の織機の基本的な構造型式や分布などを順次紹介していくこととする。今月号は、そのシリーズの第1回目として、手機を取りあげる。

手でタテ糸に張力をかける機

手機は、タテ糸の一方の端を織り手が片方の手で引張ることによってタテ糸に張力を持たせて織りをおこなうための織機である。ただし、この手機については、織機とはいつても、一般的な織機のイメージとはおおよそかけ離れた単純きわまりないものであり、その具体例としては、わが国で草履づくりやワラジづくりにもちいられてきた草履台やワラジ台があげられる。そうした草履台やワラジ台は、いずれも側面がL字形の足型を呈したもので、平板な台座の先端部に、上部が多くのはあい3本、ないしは5本の棒状に形づ

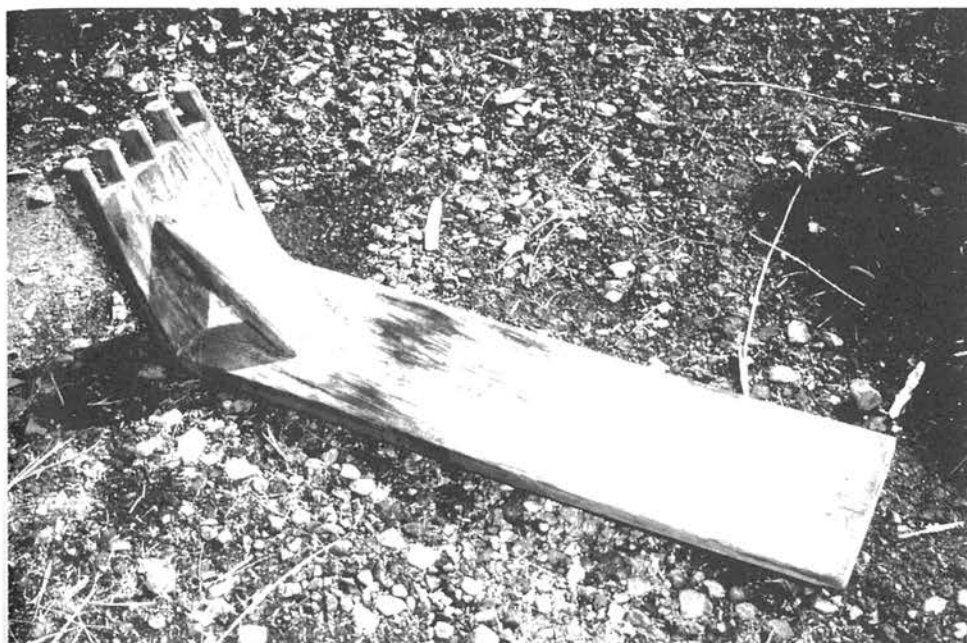


写真1 草履台（ワラジ台）（長野県、原村：1996年）



写真3 手機(草履台)による草履づくり(長野県、原村:1996年)



写真2 手機(草履台)による草履づくり(長野県、原村:1996年)

くられた板が組まれている。このような草履台やワラジ台を使用した草履づくりやワラジづくりでは、織り手は平板な台座の上に座って台を固定したうえで、台の先端上部の棒にかけたワラ縄などのタテ糸の端を片方の手でひとまとめにして握り、必要に応じて手前に引っ張ることによって、タテ糸の張力を加減する。そして、他方の手で持ったワラなどのヨコ糸をタテ糸のあいだに通し、ヨコ糸を手前に引き寄せることを繰り返しながら草履やワラジを織りあげていく。したがって、草履台やワラジ台といった手機は、タテ糸保持具、すなわちタテ糸に張力を持たせるために、タテ糸の一方を保持するための機能を備えた道具のみで成立している織機であり、一般的な織機に備わっている開口具や緯入具や緯打具などをはじめとするタテ糸保持具以外の部品はいつさい存在していない。また、このような草履台やワラジ台は、その形状と機能から織機を必要としない織りとして位置づけられる草履づくりやワラジづくりのばあいのタテ

糸をかけわたす織り手の足を模したものであることがあきらかである。したがって、織機を必要としない草履づくりやワラジづくりと、草履台やワラジ台を使用した草履づくりやワラジづくりを発達史的な視点から比較するならば、草履台やワラジ台は、織機を必要としない草履づくりやワラジづくりから発展的に出現した織機であることは間違いない。

局地的な分布の手機

本誌278号の「異形の織物5 楕円状の織物」でも述べているように、草履づくりは、日本、朝鮮半島、中国などの東アジア、および、イランで確認している。それらのうちで、とくにワラを素材としたワラジづくりについては、日本、朝鮮半島、中国でおこなわれている。しかし、日本以外の草履づくりやワラジづくりは、織機を使用しない織り、腰機を使用した機織り、および、枠機のうちには包括される弓状の織機(ワラジ弓)を使用した機織りであり、手機、すなわち、草履台やワラジ台を使用している例については知られていない。また、草履やワラジと類似した楕円状の織物としては、さきの「異形の織物5 楕円状の織物」で紹介している投石紐があるが、その製作技術についても腰機を使用した機織りや地機を使用した機織りであり、草履台やワラジ台と同様の手機を使用している例は知られていない。したがって、タテ糸の張力に注目して分類した、手機、足機、腰機、地機、枠機、錘り機という6種類の織機型式のうちで、唯一、手機として位置づけられる織機については、これまでのところ、日本人の草履づくりやワラジづくりに使用されてきた草履台やワラジ台が知られているのみというきわ



写真4 手織（ワラジ台）によるワラジづくり
（八丈島、榎立：1987年）



写真5 手織によって織られた草履
（長野県、原村：1996年）

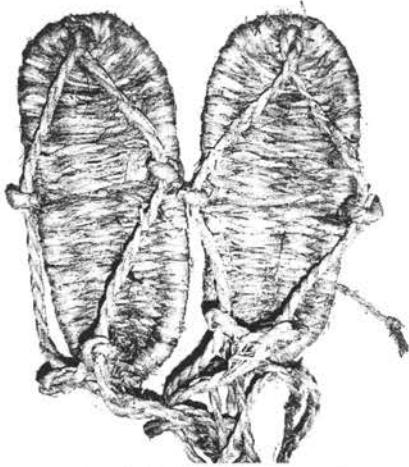


写真6 手織によって織られたワラジ
（八丈島、榎立：1987年）

めて局地的な分布があきらかになっている。ただし、こうした日本のみに認められる手織の存在については、草履づくりやワラジづくりが東アジアに普遍的な織りの技術であることから、草履台やワラジ台といった手織が日本で独自に出現した織機形式であった可能性は低く、過去には中国や朝鮮半島においても、草履台やワラジ台によって、草履づくりやワラジづくりがおこなわれていたであろうと推察される。

* * *

今月号では、誌面に余裕ができたことから、近況報告とあわせてわたしが企画に関わって開催する展覧会の予告をさせていただくこととする。

今年は今月明から毎月、北海道に出かけている。北海道には一昨年から足繁くかよって、アイヌ文化期、および、それ以前の編みや織りに関する調査をおこなっており、昨年は北海道開拓記念館で開催された特別展「北海道の基層文化をさぐる―北から南から―」で、その成果の一端を公開した。そして、このところの北海道詣では、北海道開拓記念館での第14回テーマ展「見誤った伝統？―アイヌの機織り技術―」（7月6日～8月8日）の開催に向けて準備作業をおこなっている。この展覧会は、アイヌの織機に使用されてきた櫛状の箴の前段階に、板の上下に孔のあいた板箴があったとする、これまでの見解が誤りであった可能性がきわめて大きいことを提起することをおもな目的として開催される。なお、この展覧会は、北海道開拓記念館と国立民族学博物館の共催展として開催され、今秋には国立民族学博物館においても巡回の予定となっている。

2月から3月にかけては、北海道詣でのあいまを縫って、3週間あまりペルーに行ってきた。今回、ペルーでは、10月から12月にかけて、国立民族学博物館の海外映像資料作成プロジェクトの一環としておこなう予定の映像取材の準備と調査をおこなってきた。この映像取材では、本誌に連載してきた「異形の織物」シリーズに執筆したペルー関係の異形の織物の製作工程と、リマにある天野博物館の染織品と土器を中心とした収蔵品の撮影をおこなうことになっている。そして、これらの映像取材の前後には、ペルー、チリ、ボリビア、エクアドルで、織機をはじめとする民族資料の調査と収集も予定している。

3月には、昨年までにおこなってきた北海道での調査の成果報告として執筆した論文、「擦文文化期の織機と織物―栄浦第2遺跡出土の「擦文の綜統」をめぐる―」が収録された『アイヌ文化の成立』（北海道出版企画センター刊）が出版された。

同じく3月には、国立民族学博物館の国内映像資料作成プロジェクトとして、1999年と2001年に新潟県山北町山熊田で映像取材をおこない、わたしが制作監修した長編ビデオ番組「シナ布の里」が完成した。この番組は、今後にダイジェスト版を編集して、国立民族学博物館のビデオテープで公開する予定である。

なお、今後の予定としては、ペルーに出かける前の8月から9月にかけて、コカサスとシリアにおいて織機と機織り技術の調査を予定しており、今年もあいかかわらず東奔西走の日々が続きそうである。

（国立民族学博物館民族文化研究部教授／

よしもと・しのぶ）